

「認知症を正しく理解しよう」

平成 26 年 8 月放送

玉井 顯

認知症は脳の病気です。どうして真っ先に脳の病気という事を強調するかと言いますと、これまで認知症に対する見方は、マイナスイメージを持たれてきた、という歴史があるからです。そして、最近では、徘徊による行方不明者や踏切事故など認知症に関連する報道もマスメディアで取り上げられるようになり、多くの方に知っていただける病気になってきました。しかし残念なことにそれらの一部は認知症という病気に対する恐怖を生みかねない報道であるのも事実です。



認知症にはアルツハイマー病やレビー小体病、あるいは血管性の認知症など様々な病気があります。また、同じアルツハイマー病であっても、その方の性格や職業、家族要因や地域性などが異ると、認知症の症状もその人独自のユニーク・ワンの症状になります。

残念なことに、これまで認知症は「痴呆」や「ボケ老人」などと呼ばれ、診断されることは恥ずかしいこと、家族としても周囲に知られたくない病気として理解されてきました。認知症は誰でもかかりうる疾患であり、特別な病気ではありません。社会に認知症という疾患について正しく知ってもらうこと、認知症に対するポジティブな啓発がなされれば、認知症になっても安心して暮らせる町ができ、認知症のことを理解してくれる地域住民が増え、認知症を恐れ

ることなく理解してくれる家族がいて、さらに言えば自分が認知症になることを想定した人生の計画作りの可能性もこのような肯定的な捉え方から見えてくることだと考えています。

では、具体的にどのようにすれば認知症になっても安心して過ごせる社会の構築ができるのでしょうか。まずは、啓発活動を通じて認知症に対する必要な情報や公開講座の実施といった心理教育などを取り入れ、認知症に対する正しい知識を知っていただくことが重要でしょう。

次に早期発見・早期診断の重要性です。正しい啓発で認知症が怖い病気ではないことがわかれば、早い段階から適切な支援を受けることのできる可能性にもつながるでしょう。そして、もし早期の発見ができなくても、社会が認知症について正しい理解があれば、認知症になっても安心して暮らせる社会の一步を踏み出せるでしょう。「認知症 800 万人時代」と呼ばれる現在、認知症を正しく理解してくれる人々である「オレンジリングを持つ認知症サポーター」は全国で 500 万人にもものぼっています。認知症を特別な病気ではなく、お互いに理解しあい、住みやすいコミュニティづくりその人に合ったその人らしい暮らしのあり方をより多くの方々と増やしていくことを期待しています。

最後に、早期発見・診断の有益性についてお話させていただきます。認知症は誰でもかかる可能性のある病気です。認知症という病気を恐れることなく、早期に発見・診断を受けることによって、ご本人だけでなく家族や地域自治体などが一体となって、ご本人の受けたい支援が受けられる社会にしていきたいのです。もし、自分や家族が「あれ、何だか最近おかしいな」と感じたら、積極的に医療機関を受診し、診断を受け、その方に合った受けたい支援を受けられるような社会を作っていきたいのです。

認知症の対応は、世代を超え様々な職種の人々の連携なしには解決しないと思います。核家族化が進み、地域の間人間関係が薄らいでいる現代だからこそ、認知症の方々から発せられるメッセージをよりどころにもう一度、原点に戻る

ことが求められているのではないのでしょうか。認知症の方を診させていただくと、私には「みんなで手をつないで仲良くして欲しい」というメッセージを発しているように感じられます。日本中がそのような社会になることを願っています。